異文化研究の視座による川端文学の一端

―「夕映少女」を例として―

范　　淑　文*

1．日本文学研究と異文化研究のクロス

異文化とは目新しいことばではないが、本論に入る前に先ずその定義について改めて考えてみたい。

（1）しかし、森において最も特筆すべき点は、異文化に触れた日本人の西欧体験としての独自性ではないでしょうか。それは夏目漱石や森鴎外、永井荷風ら明治以後の近代日本知識人のいずれとも異なるものであり、「日本文学」「異文化」「異種の文明」という枠組みを本質的に突き抜けていく根源性を志向するものでした。[1]

（2）ここで遠藤は自分の最も身近な家庭そのものが異文化体験の場であったと語っています。そうした遠藤の過半生の異文化体験をたどると、まず、東京に連れられて熱心なカトリック信者の伯母（母の姉）のもとでひと夏同居したのを契機に、伯母の勧めでカトリック教会に通うようになります。[2]

（3）本研究の基本コンセプトにかかわる研究目的は次の二つである。一つは、外国の日本学研究（＝他者）の視点を取り入れて、日本文化をより科学的に理解、研究するための「ジャパノロジー（日本学）」の構築である。（中略）もう一つは、他者の視点による「異文化」という観点から日本文化を再発見・再発掘し、日本文化研究に新局面を切り拓くことにある。[3]

（1）に言及されている森鴎外や夏目漱石、永井荷風などの作家からでは、作家自身が海外――当時では日本より近代化が進んでいるヨーロッパやアメリカなどが主要な対象国――へ自ら訪れ、その国で触れた文化が異文化と見なされている。（2）に語られている異文化とは、遠藤周作が体験し、ほぼ過半生かかわってきたカトリック、言い換えれば（1）と同じく、西洋の文化を指していると言えよう。（3）は法政大学国際日本学研究所が平成19年から21年にかけて進めていた『異文化研究としての「日本学」』と題した学術フロンティア推進事業の一環である、王敏による「異文化としての日本」」と題した論文の冒頭に書かれた一節である。そこに示されている二つの研究目的――研究方向――は、海外（他者）からの視点及び、「他者の視点」による日本文化＝「異文化」の新たな発見が要求されている。

上掲の異文化言説に従うと、日本文学研究のジャンルでは、早い時期には作家自身の海外、殊に西洋の体験或は作品に盛り込まれた外国文化がその研究の対象となっていたが、近年になると、如何なる内容の日本文学をも問わず、海外からの視点、つまり外側からの研究が進められる一方、「他者」の視点によるあらゆる可能性の研究も大いに期待されるのは言うまでもない。となれば、後者である「他者」の視点による日本文学研究に至った場合、研究者が様々な方法を駆使し、これまで見落とされていた「異」を新たに発見し、あらゆる研究を試みなければなるまい。言い換えれば、「異」の発見の新たな視点が求められるのである。そこで、「民族の単位で見たり、地域の

＊台湾大学　日本語文学科教授

単位、果ては家族の単位で見るため、一概に言えない。」[4]という視点を、異文化に対する定義に据えれば、外国文学と異なっている点以外に、時代的、ジャンル的、或は作家別でそれぞれの特徴を「異」と見なすことが可能になるのであろう。

小稿では、こうした異文化研究の視座により、最も日本的と思われる作家川端康成の「夕映少女」という短編小説に焦点を合わせ、川端文学の日本的な部分――外側から見た「異」――を見出すとともに、日本文壇における川端文学の特徴――内側から見たその「異」――を抽出し、川端文学の一側面の解明を試みる。

2.「夕映少女」に描かれている女たち

「夕映少女」は昭和11（1936）年スタア社発行の雑誌『333』12月号に掲載された短編小説である。瀬沼という登場人物の語りによって、海辺にあるリゾート地のようなところに引っ越して来た春子、瀬沼が泊まっている旅館の女中らの話を通して知る、病気の静養でそこの別荘にいる少年及び近所の少女との恋、そして、心中と思われる二人の失踪、というのが作品の粗筋である。が、その粗筋より、語り手の瀬沼が気を奪われた対象である少女、自転車に乗っているその少女の「鮮やかな生きものの」ようなイメージ、自転車に乗って夕日に向かって走って行く少女の姿、春子の夫である松本という画家によって描かれた少女の絵などの描写の方がモチーフにつながっていると思わずにはいられない。この少女のキャラクターをキャッチするには、その対照的な存在として描かれている春子及び女中の一人であるお栄も見落としてはなるまい。

2.1　性的雰囲気に満ちた春子・お栄

この別荘地で瀬沼に声を掛けた春子は瀬沼が学生時代によく通っていた喫茶店の女給で、現在松本という画家と一緒に暮らしている妊娠中の女性である。そして、お栄は瀬沼の泊まっている旅館で働いている女中の一人である。テクストより抜粋して二人の特徴を見てみよう。

（1）その顔はオレンヂのざつなドオラン化粧で、バアマネント・ウエエヴの髪も亂れるにまかせ、よれよれの銘仙に半纏をひつかけ、だらしない着つけで、（中略）女は半纏を脱いで、前に持つた。真實なつかしげな素振りで、それは自然と媚びを含むほどだつた。妊娠してゐるのだなと、瀬沼は氣がついた。（『川端康成全集第五巻』以下同、pp.555、556）（下線筆者、以下同）

（2）もう三十近くだから、走り慣れないので、裾を氣にしながら、しかも亂れるにまかせるといふ風だつた。（p.561）

・「野蠻だね。」と、瀬沼は笑つたが、その獣じみた寝姿には、煽情的なものがあつた。（p.564）

・枯芝の匂ひのなかに女の汗の匂ひが微かに揺れた。（中略）しかも健かな體のうちに、彼女は野蠻な熱情をひそませてゐるのだらう。（pp.565、568）

上掲の（1）は春子、（2）はお栄への描写であるが、「ドオラン化粧」、「髪も亂れるにまかせ」、「女の汗の匂ひ」、「煽情的なもの」などの表現から、語り手である瀬沼の目にはいずれも外見、しかも肉体的、性につながる雰囲気が強いものとして映っていることは明かである。更に、その次「年は同じくらゐであらうが、生き生きした野性とうらぶれた素直と、二つとも女といふものの裸の姿であるやうに思はれた。二つの生活の繪がいろいろと瀬沼の頭に浮んで來た。」（p.568）という露骨な表現が用いられている点から、春子もお栄も魅力的な女として瀬沼に見られながら、二人とも軽蔑されるような下品な雰囲気や厭な印象は毛頭にない。

2.2　処女性が讃えられる「少女」

さて、モチーフにつながるキャラクターである「阪見」の少女は如何に描写されているだろうか。語り手である瀬沼が実際に少女を見たのは、海辺

で弟（何らかの病で静養している弟）と夕日を楽しんだあと、自転車に弟を乗せて帰途に向かおうとした場面の少女、その一回っきりである。それ以外に、実物ではなく、少女を見かける前に展覧会で展示されている少女の絵――のち、恋と思われるその相手である竹田の少年の部屋に飾られている絵――であった。短い時間であったが、瀬沼には印象深かった。テクストから瀬沼の目に映った少女の姿や旅館の女中らに語られている少女の印象の描写を抜粋して見てみよう。

（1）女學生風な斷髪を耳へ掻き上げ、（中略）弟は彼女と同じくらゐに背が高く、肩のあたりが病身に見えた。姉の耳は福々しい豊かな形だが、寒さに白み、瀬沼を振り向いた頬の色も失はれてゐた。ただ、その目は鷹のやうに光つてゐた。（中略）すつと横を向いてしまつた。高慢にはちがひないが、上品な育ちを思はせる、自然なしぐさではあつた。（中略）少女の自轉車はそれを夕日に向つて走つて行つた。今に地を離れて、夕燒の空へ浮び上つてしまひさうに見えた。（pp.559、560）

（2）いかにも貴族的でいらつしやいますわ。あんまりおきれいなのも、取つつき場がなくて、考へものぢやないかしら。（p.567）

（3）實在の少女よりも生きてゐた。ほの暗い部屋の壁から、高貴なあこがれの眼で、少年を見下してゐた。（中略）少女の顔になにか貫くやうな美しさがあるといふより、畫家の切ないあこがれが現れてゐたので、瀬沼の印象に殘つた繪である。少女の鷹のやうに光る目は、少年を哀れんでゐるやうであつた。（p.571）

（1）は瀬沼の目に映っている少女像である。前節に上げた春子やお栄のような、性につながる女性の魅力的な美の描写が見当たらず、その外見については、「鷹のやうに光つて」いる目や、「福々しい豊かな形」の耳位の描写にとどまっている。それ以外は「高慢にはちがひないが、上品な育ちを思はせる、自然なしぐさではあつた」といった、育ちや雰囲気についての描写である。「高慢」とはいえ、「上品な育ち」という好感を与えるような気品が漂っていると映っているのである。（2）は瀬沼が泊まっている旅館の女中お種が語っている少女像であるが、「取つつき場がな」いほどきれいだという具体的な顔立ちに関する評価以外に、「貴族的」といった印象は語り手である瀬沼の見方と合致している。そして、（3）は春子の夫である高松が描いた少女像を瀬沼の目を通して捉えた印象であるが、その「高貴なあこがれの眼」の印象は（1）番の「上品な育ち」という瀬沼の語りと相通じるほか、瀬沼の目に映っている少女の目も高松の絵に描かれている少女の目も「鷹のやうに光る目」という表現を用いている。こうした共通した評価から、語り手である瀬沼個人の好みでもなく、主観的な見方でもないと捉えられよう。では、前節の春子・お栄と少女とは如何異なっているのだろうか。それぞれの特徴を改めて次の表にまとめて見てみよう。

表1に並べた内容からでは、次の二つのタイプ、キャラクターに分けることができる。

(1) 性的な匂いが漂っている女性――

お栄が野生的で性的な匂いが漂っている女性であるのは明らかであろう。春子の方は、「妊娠してゐる」ことが性にもつながる。そして「二つとも女といふものの裸の姿であるやうに思はれた。二つの生活の繪がいろいろと瀬沼の頭に浮んで來

表1

人物	年齢	描写のポイント・イメージ
春子	30歳	ウエエヴの髪も亂れるにまかせ、だらしない着つけ、妊娠してゐる
お栄	30歳	女の汗の匂ひ、煽情的、野生的、野蠻な熱情、陽氣
少女	15、6歳	女學生風な斷髪、耳は福々しい豊かな形、鷹のやうに光る目、はつきりうなづいて、上品な育ち、貴族的

た。」という瀬沼の想像が、お栄も春子も性的な匂いが漂う女性として作られた最も有力な根拠になるのであろう。

(2) 貴族で不可侵的な少女――

顔立ちについては「耳は福々しい豊かな形」という描写しか見当たらず、貴族的や「鷹のやうに光る目」という表現が繰り返されている点からでは、この15、6歳の少女は、春子やお栄に比べ、肉体的な部分が意図的に避けられているのがうかがえよう。言い換えれば、少女の美しさは女――性的な匂い――とは縁遠いものであろう。となれば、春子もお栄も少女の非「性的」な面を引き立てる役割が付与されていることも十分に考えられよう。この非「性的」な面は、「少女の自轉車はそれを夕日に向つて走つて行つた。今に地を離れて、夕燒の空へ浮び上つてしまひさうに見えた。」、「阪見家の少女が天女のやうに高く輝いてゐた。」といった、昇天イメージの表現によって更に固められている。すなわち、この作品の中で一種の処女性が最高の美――語り手である瀬沼と画家である松本の憧れの美――が讃えられていると言えよう。

3．川端文学にある処女崇拝

「鷹のやうに光る目」や高貴――不可侵的――といったキャラクターの設定は『雪国』にも見られる。

・悲しいほど美しい聲であつた。高い響きのまま夜の雪から木魂して來さうだつた。
（『雪国』『川端康成全集第十巻』以下同、p.10）

・娘の片眼だけは反つて異様に美しかつたものの、（中略）彼女等が汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すやうな娘の美しさに驚いて目を伏せる途端（後略）（p.12）

・澄み上つて悲しいほど美しい聲だつた。どこかから木魂が返つて來さうであつた。
（中略）しかし葉子はちらつと刺すやうに島村を一目見ただけで、ものも言はずに土間を通り過ぎた。（中略）葉子の目つきが彼の額の前に燃えてゐさうでならなかつた。（中略）島村はなんともいへぬ美しさに胸が顫へた、その昨夜の印象を思ひ出すからであらう。（pp.47、48）

・雪の信號所で驛長を呼んだ、あの聲である。聞えもせぬ遠い船の人を呼ぶやうな、悲しいほど美しい聲であつた。（p.96）

上掲は、葉子に対する描写の抜粋である。性的な魅力が溢れる駒子とは正反対で、葉子には性的な描写が見当たらず、「片眼だけは反つて異様に美しかつた」「悲しいほど美しい聲であつた。」などのように目のほか、声に特に焦点が絞られ、それが彼女の魅力であるように語られている。立原正秋は、そのような声から葉子を「現世の女ではない」[5]と見なしている[6]。作品全体に「現世」でない雰囲気が満ちていることは否定しないが、そのような世界でも、性的な存在の駒子[7]と対照的に、葉子の「刺すやうな」目――島村を見詰める目――の設定は、男性である島村と距離を隔てることが成り立ち、性に一線を画す役割を果たしている。つまり、「夕映少女」の非「性的」なキャラクターも『雪国』に見出すことができたのである。更に、物語の終盤、火事で二階から落ちて来た「葉子の昇天しさうにうつろな顔が垂れてゐた。」(p.140) という昇天の言及は葉子の非「性的」――処女性――を徹底したとも捉えられよう。

青野季吉は川端文学の美について、「私は、「源氏」の美と川端氏の作品の美とに、相通ずるものがあるのを感じてゐる。(中略)この世ならぬ美しさや、妖しさは、川端氏の作品の人物にも、その血縁をみることが出来る。」[8]と、『源氏物語』との共通性を語っている。私はここでは「夕映少女」や『雪国』の葉子に共通している処女性に焦点を合わせてもう少し考えてみたい。川端自身が昭和44（1969）年5月にハワイ大学ヒロ分校で「美の存在と發見」と題したテーマで行った公開講義

の内容の中には次の一節がある。

「竹取」の作者の、美の發見、感得、創作と信じて、自分もこころざす、日本の小説の元祖の着想が、なんとも言へず美しいのは、ふるへるほどのよろこびでした。また、少年のわたくしは、「竹取」を聖處女崇拜、永遠の女性の讃美と讀み取つて、うつとりするほどのあこがれでした。(中略)「竹取物語」を、それが成立した時代の人の、無限、悠久、純潔への思慕、憧憬のあらはれだとする、今日の國文學者の説も、わたくしはホノルルで改めて讀みました。

(『川端康成全集　第二十八巻』p.407)

川端は紫式部や清少納言、芭蕉など日本文学の古き時代からの流れを賞賛し、『竹取物語』を「聖處女崇拜、永遠の女性の讃美」と読み取り、少年時代にその美しさに傾倒していたと述懐しながら述べている。その美しさが「ふるへるほどのよろこび」だという表現は、上掲の『雪国』の引用文にある「なんともいへぬ美しさに胸が顫へた」という描写と相通じていることは明らかであろう。その葉子は上述したように、処女性が付与されている点も『竹取物語』と一致している。のみならず、その処女性を固める要素の一つである昇天の部分も重なっているのは、意義深い。川端が少年時代から愛読していた『竹取物語』への憧れ――かぐや姫の昇天――を文学創作の際、無意識に再現したと見ることも可能であろう。

その処女性につながる昇天の設定は「夕映少女」にも盛り込まれている。

・夕日に向つて走つて行つた。今に地を離れて、夕燒の空へ浮び上つてしまひさうに見えた。
・瀬沼があわてて目をそらすと、今日も夕映は廣々と美しかつた。
・弟をうしろに乗せて、夕映の空に昇天して行くやうな少女を繪にすることを、春子の夫に勸める時もあらうと思つた。

一番は語り手である瀬沼が少女と海辺でたった一度だけ会った場面で、海辺で夕日を楽しんだ後、帰途に向かう描写で、夕日→「地を離れて」走っていくという少女の姿はまるで昇天していく様子のように語り手の目には見えた。二番目は本物の少女ではなく、竹田の少年の部屋に掛けてある少女の絵の「鷹のやうに光る目」を見た後の瀬沼の心境描写である。少女の絵→「今日も夕映は廣々と美しかつた。」という瀬沼の目の動きに従えば、画に描かれている少女も一番のイメージと同じく、夕日に昇っていくという暗示として捉えることもできよう。そして、三番目は少女も恋の相手の竹田少年も失踪してしまい、二人が心中だと別荘に集まった近所の人々に推測され、少女のもう一枚の絵が描かれるのを瀬沼が想像している場面である。瀬沼が前回少女に会った時、つまり一番の場面の再現、少女が夕日に向かって昇天していく、という絵である。いずれも、夕日に向かって昇天していく姿である。かぐや姫の昇天――「聖處女崇拜、永遠の女性の讃美」――という、川端が『竹取物語』で感動し、賞賛した美の再現であるのは明らかであろう。

4．結び

以上述べたように、『竹取物語』に詠われている「聖處女崇拜、永遠の女性の讃美」という、外側からみた異文化――日本的、日本の美――を「夕映少女」『雪国』にも見い出すことができた。それが、川端文学の底にある「無限、悠久、純潔への思慕、憧憬」であろう。

一方、「夕映少女」の少女は、日本の伝統的な女性とは全く異り、「鷹のやうに光る目」や「はつきりうなづい」た、などのような表情を持っている。控えめという日本的なしなやかな表情とは正反対の少女の目やはっきりと意思表示する点は、『雪国』の葉子の「ちらつと刺すやうに島村を一目見た」表情と相通じている。のみならず、掌編小説「夏の靴」の少女になると、「息をしながら

眼がきらきら光つてゐる」、「横の海に目をそらして」、「勝氣な顔色」と、更に強調されている。[9]女性地位がまだ低かった当時の社会においては、個を主張するそれらの表情は、つまり日本文壇の中の「異」――内側から見た「異」――と見なすことができよう。このように異文化の視点より、最も日本的だと思われる川端文学を研究視座に入れたとき、外側から見た「異」――川端文学の日本古典の系譜を引いた部分――を見い出すと同時に、内側から見た「異」――日本文壇と異なっている川端文学の特徴――をも発見することを試みたのである。

注

1　釘宮明美「森有正――異文化との接触から「経験」の創造へ」『アウリオン叢書11異文化の中の日本文学』責任編集：海老根龍介、福田耕介2013.1.10弘学社p.91

2　山根道公「遠藤文学と異文化体験」『アウリオン叢書11異文化の中の日本文学』責任編集：海老根龍介・福田耕介2013.1.10弘学社p.142

3　王敏「サブ・プロジェクト②「異文化としての日本」」『異文化研究としての「日本学」』（平成19年度～平成21年度私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」研究成果報告書2010.5.24法政大学国際日本学研究所）p.70

4　https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%95%B0%E6%96%87%E5%8C%96#.E5.8F.82.E8.80.83.E6.96.87.E7.8C.AE（2016.01.01）

5　立原正秋「川端康成――永遠を見た人――」（編者　羽鳥徹哉『日本文学研究資料新集　27　川端康成・日本の美学――』1990.6.5有精堂出版株式会社p.61

6　青野季吉は物語の異様な雰囲気に注目して葉子も駒子も「この世のものであつて、同時に、この世のものではない。」という見解を示している。（青野季吉「川端康成の作品について」「川端康成――永遠を見た人――」（編者　羽鳥徹哉『日本文学研究資料新集　27　川端康成・日本の美学――』1990.6.5有精堂出版株式会社p.40）（初出―「知性」1941〈昭16〉年三月号、のち『青野季吉選集』（河出書房、1950〈昭25〉年八月刊）に「川端康成の作品」の題で収録）

7　羽鳥徹哉は「川端は何とか虚無を越えて生き抜こうとする女の姿を描き、自らもまた、一応虚無からの脱出を遂げた。」と駒子の生き方を言及し、そこで川端の当時の状況をも駒子に重ねて語っている。（羽鳥徹哉「戦争時代の川端康成」編者　羽鳥徹哉『日本文学研究資料新集　27　川端康成・日本の美学――』1990.6.5有精堂出版株式会社p.148）

8　青野季吉「川端康成の作品について」「川端康成――永遠を見た人――」（同注６）

9　羽鳥徹哉は「裏側に孤児の悲しみを隠しながら、それに耐えて鋭く生ききろうとした、若い日の川端の心情が、こういう少女像に如実に反映している。」と、川端の孤児根性と照応しながら少女の内面を捉えている。小稿では、処女性に注目しながら少女の性格を考えている。（羽鳥徹哉「川端康成」『研究資料現代日本文学　第一巻　小説・戯曲』編者　浅井清・佐藤勝・篠弘・鳥居邦朗・松井利彦・武川忠一・吉田凞生1990.11.20明治書院p.274（1966.3.5初版））

参考文献

テクスト　『川端康成全集』全35巻１999.10新潮社

青野季吉「川端康成の作品について」「川端康成――永遠を見た人――」（編者　羽鳥徹哉『日本文学研究資料新集　27　川端康成・日本の美学――』1990.6.5有精堂出版株式会社

王敏「サブ・プロジェクト②「異文化としての日本」」『異文化研究としての「日本学」』（平成19年度～平成21年度私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」研究成果報告書2010.5.24法政大学国際日本学研究所）

釘宮明美「森有正――異文化との接触から「経験」の創造へ」『アウリオン叢書11異文化の中の日本文学』責任編集：海老根龍介、福田耕介2013.1.10弘学社

立原正秋「川端康成――永遠を見た人――」（編者　羽鳥徹哉『日本文学研究資料新集　27　川端康成・日本の美学――』1990.6.5有精堂出版株式会社

羽鳥徹哉「戦争時代の川端康成」編者　羽鳥徹哉『日本文学研究資料新集　27　川端康成・日本の美学――』1990.6.5有精堂出版株式会社

羽鳥徹哉「川端康成」『研究資料現代日本文学　第一巻　小説・戯曲』編者　浅井清・佐藤勝・篠弘・鳥居邦朗・松井利彦・武川忠一・吉田凞生1990.11.20明治書院

山根道公「遠藤文学と異文化体験」『アウリオン叢書11異文化の中の日本文学』責任編集：海老根龍介・福田耕介2013.1.10弘学社

『異文化の中の日本文学』責任編集：海老根龍介・福田耕介2013.1.10弘学社